



Title	Pater の 'Winckelmann' における「教養」の問題(1)
Author(s)	内田, 義郎
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1975, 16, p.35-46
Issue Date	1975
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/9646">http://hdl.handle.net/10069/9646</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-21T17:02:39Z

## Pater の 'Winckelmann' における「教養」の問題(1)

内 田 義 郎

### The Problem of 'Culture' in Pater's 'Winckelmann' (1)

YOSHIRO UCHIDA

1867年1月、27歳の Walter Pater は、*Westminster Review* (以下 *Westminster* と略す) に 'Winckelmann' <sup>(1)</sup> を発表した。Otto Jahn の *Biographische Aufsätze* (1866) — そのうち的一篇が「Winckelmann の伝記」であった——の書評として、匿名で発表したのである。

*Westminster* は、Pater の著述活動にとって最初の舞台であった。1866年1月(26歳)から1868年10月(29歳)までのあいだに、彼はこの季刊評論紙に三篇の論文<sup>(2)</sup>を寄稿した。いずれも匿名の書評である。その二回目の寄稿が、いま問題にしている 'Winckelmann' である。これら、三篇の論文は、19世紀の書評にはよく見られることであるが、表向きは新刊書評であるけれども、内容的には本格的な批評である。当時文壇的にはまだ無名の青年にすぎなかった Pater には、おそらく、このような匿名書評という形でしか、自己の批評活動を公表する機会があたえられていなかったのであろう。つまり、彼は *Westminster* の匿名書評に自己の批評的精神活動のはけ口を見いだしていた、と考えられる。

やがて1869年11月、Pater は、自由主義的進歩思想にとつての最高の舞台と認められていた John Morley 編集の *Fortnightly Review* (以下 *Fortnightly* と略す) — 実には月刊誌 — の寄稿者に加えられた。<sup>(3)</sup> これによって彼は名声噴噴たる寄稿者につらなるという名誉を得ただけではない。より実質的な便宜をも得たのである。すなわち、彼は新刊書評という条件がつかない論文を — 自己の主題を自分で自由に選択することができ、かつ書評という形式からくる制約にしばられずに自己の論旨を自由に展開することができる論文を — 公表する機会を *Fortnightly* によってあたえられたのである。また、*Fortnightly* では彼の文章が署名論文として発表されるということも、彼には望ましいことと思われたであろう。事実、*Fortnightly* の寄稿者になってからは、Pater は *Westminster* に寄稿していない。すでに *Fortnightly* によって上に述べたような便宜を得ていた Pater には、もはや、*Westminster* の匿名書評に自己の批評的精神活動のはけ口を見いだす必要がなくなっていたのであろう。<sup>(4)</sup> もっとも、これ以降にも彼は時に応じて書評を書く。が、これら、後年の文章は普通の意味での新刊書評に

より近いものになる。

以上の事情および簡単な推測をあわせ考えると、*Westminster* 発表の匿名書評論文においては、その表向きの対象である新刊書と、その実質的な内容をなす Pater 自身の批評的精神活動とのあいだには、直接的な、密接な因果関係はかならずしも存在しない、ということになるであろう。つまり、両者のあいだにこのような因果関係が存在するという推測は、一応疑問視されるべき仮説、慎重な検討の対象となるべき仮説である、ということになるであろう。これまでの Pater 研究者の多くはこの慎重さを欠いているように思われるのである。

話を 'Winckelmann' に限ることにしよう。多くの研究者は、Jahn の「Winckelmann の伝記」を読んだという Pater の経験と、*Westminster* の書評論文における Pater の知的活動ないしは感情状態を直線的に結びつけようとする。たとえば、前者が原因となって後者が結果したというような説明をする。古典的な例を挙げよう。

実際生活に接触するようになったことは、初めてイタリア文芸復興期の芸術作品をまのあたりに見たことと相俟って、Pater の思念を次第に形而上学的思索から遠ざけた。彼が Otto Jahn の「Winckelmann の伝記」を発見したとき、この回心はもはや決定的なものとなった。この伝記は彼の精神に新しい展望を開いてくれたのである。すでに Goethe の教義はあまりにも激情的であり、あまりにも官能的であると思われるようになっていた。Ruskin の理想主義はあまりにも情感に流れて、調和と自制を失っていた。Hegel と Schelling は、崇高な言葉で感動を呼び起したが、あまりにも現実から遊離していた。しかるに、Winckelmann こそは、いささかも感覚を汚濁せしめることなく美の熱情的な観照に専心しうる人物であると思われた。……<sup>(5)</sup>

これは A. C. Benson の *Walter Pater* (1906) の一節である。Benson の著書は、厳密な意味での伝記と言うよりは、むしろ、いわゆる〈人と作品〉の観点から Pater 全体を問題として論じた評伝と言うべきものであり、その作品の展開のうちに Pater の精神的発展をあとづけようと試みるものであった。その翌年には、この Benson の著書を補正し、その伝記的部分における若干の誤りを訂正することを意図する Thomas Wright の *The Life of Walter Pater* がでた。これはこれまで書かれた唯一の、厳密な意味における Pater の伝記である。このなかで Wright は、Pater の 'Winckelmann' 執筆の動機を次のように説明する。

これまで Pater は主として Ruskin と Goethe を靈感の源泉としていたのであったが、いまや Ruskin はあまりにも冷ややかにすぎ、Goethe はあまりにも抑制が強すぎると思われた。Pater 自身は、感覚を陶醉麻痺せしめる美の追求に熱中し、またイギリスロマン派の詩人〔の作品〕との接触によってすっかり有頂天になって、*Endymion* を構想中の Keats の心境——'A thing of beauty is a joy for ever' に始まる創作の嵐を可能ならしめたあの

興奮の渦——にも較ぶべき心境に到達していたのである。……彼がこの興奮状態にあったとき、たまたま出版されたばかりの Otto Jahn の *Biographische Aufsätze* が彼の目にとまった。この評論集の一篇「Winckelmann の伝記」を彼はわれを忘れて読みふけた。かつて例のない耽読であった。Winckelmann のうちに彼は自己自身の姿を——〈美の認識の達成〉という自己の生涯の唯一の念願の妨げになると思われるものは、いっさいこれを放擲してためらわない熱烈な関心魂を——見る思いがするのであった。……<sup>(6)</sup>

当時の Pater の Goethe 観についても（「あまりにも激情的、あまりにも官能的」と「あまりにも抑制が強すぎる」）、また Ruskin 観についても、Benson と Wright はまったく反対の敘述をして、伝記製作の——一人の人間が他の一人の人間についての物語りを作るという行為の——基本的性格ないしは条件をあらためて考えさせてくれる。けれども、Jahn の「Winckelmann の伝記」を読んだという Pater の経験が源泉となって、そこから 'Winckelmann' における Pater の知的活動ないしは感情状態が生まれた説明する点においては、Benson と Wright は一致しているのである。もちろん、Pater が「Winckelmann の伝記」を読んだことは事実である。また、彼がそれを読んで感動したことも事実であろう。（感動なき読書は、知識の集積には役立つかもしれぬが、Pater が強調する「自己教養」——自我が変様することによって成長すること——とは無縁である。）が、Pater が感動したか否かが問題なのではない。彼の感動の内容が問題なのである。それは、はたして、Benson と Wright がそれぞれに考えているようなもの—— Benson が「回心」と言うようなもの、Wright が「耽読」と言うようなもの——だったであろうか？さらにまた、Pater の Winckelmann への共感の背後に Goethe からの離反があったと説明する点においても、両者は一致しているのである。たしかに、Pater の Goethe 観には、批判的側面と呼んでもよいような一面があった。<sup>(7)</sup> これを否定しようとは思わない。が、問題は、ここでもまた、Pater の批判の内容なのである。それは、はたして、彼らが考えているようなもの—— Goethe はあまりにも激情的、あまりにも官能的である（Benson）とか、あまりにも抑制が強すぎる（Wright）とかいうたぐいの批判——だったであろうか？

が、ともかく、この二つの伝記が出て以来、Pater 論者の多くは、この点に関しては、Benson 説あるいは Wright 説を受けついできたようである。であればこそ、「'Winckelmann' の弁証法はきわめて複雑に組み立てられているので、Pater が何を主張しようとしているかは、また彼の議論が何を母胎としているかは、まだよく理解されていないようである」<sup>(8)</sup> という DeLaura の発言が、'Winckelmann' が世に出てから100年以上もたって、現われるのである。もっとも、DeLaura 自身は、主として Arnold と Pater の関連を念頭におきながら、こう言っているのである。が、この言葉は、やがてわかるように、Goethe と Pater の関連に関してもきわめてよくあてはまるのである。



自己教養の本能にしたがって、Pater は、彼の内面世界に持続する生命が——彼の自我が——外からのさまざまな影響をこうむるのを許した。が、彼は、この同じ本能にしたがって、これらの影響を、主として、彼の自我の燃焼と変様のために消費した。したがって、Pater の場合には、彼が先人からいかに深い影響を受けたにせよ、その影響が直接的な形のまま彼自身の文章に現われることはあまりない。が、彼がまだ27歳の無名の青年のとき発表した論文‘Winckelmann’は、以上の一般論に対する除外例であると言えよう。‘Winckelmann’においては、Goethe の影響は、その verbal なレヴェルにおいても、明瞭に現われているのである。

それは、まず、この論文に前置されている motto に現われている。「われもまたアルカディアにありき。」（‘Et ego in Arcadia fui.’）Goethe が *Italienische Reise* の motto として用いたこの言葉を、Pater はそのまま彼の論文の motto として借用するのである。そして、*Italienische Reise* が、Goethe にとって、暗い北方精神からの解放と、南方の明るい光のなかでのあらたなる自己の誕生とをもたらしたイタリアの旅を記念する作品であることを思えば、Pater がこの motto に籠めた意味は明らかであろう。彼は、Goethe の *Italienische Reise* と彼自身の‘Winckelmann’とのあいだに執筆の動機の完全な一致を認め、ドイツ観念論哲学からの解放と、新しい自我の発見とを自他に告知するこの論文をひとつの「イタリアの旅」と——彼自身の「イタリアの旅」と——見なしたのである。（ちなみに、彼もまた初めてのイタリア旅行を経験した直後だったのである。）そして、彼はこの motto によって言わんと欲したのである：——「われもまた（Goethe と同じく）古き自我の呪縛を破りて、新しき自我見いだしたりき。……」と。

が、motto だけではない。‘Winckelmann’における Goethe への言及、あるいは Goethe の著作ないしはその内容への言及は、計27回に及ぶのである。Pater の論文の一般的な書きかたからすれば、これは異例と言うべき数字である。さらにこれらの言及のコンテクストを調べてみるならば、それらはいずれも Goethe への共感を直接あるいは間接に表明するものであって、Benson や Wright が主張するような Goethe からの離反を暗示するものは一つもないことがわかる。この点では、Hegel への言及や、Arnold への言及がしばしば批判あるいは修正の意図を含意するのと対照的である。

また、言及される Goethe の作品は、*Winckelmann und sein Jahrhundert* 中の‘Winckelmann’ (9)、*Dichtung und Wahrheit* (5)、*Italienische Reise* (2)、*Iphigenie auf Tauris* (1)、*Wilhelm Meisters Lehrjahre* (1)、*Die Wahrverwandtschaften* (1)、および‘Generalbeichte’ と題する詩(1)にわたり（括弧内の数字は言及度数をしめす）、そのほかに Eckermann の *Gespräche mit Goethe* から一つ一つの引用があって、当時 Pater が Goethe をよく読んでいたことをしめしている。特に、これらの作品がすべて *Iphigenie* (1787) 以後

の作品、すなわち、*Sturm und Drang* から古典主義への転向後に書かれた作品であることは注目してよいことであろう。さらに、Goethe の評論 'Winckelmann' への言及がもっとも多いのは Pater の論文の主題から当然であるが、そのほかでは Goethe の著作のなかでも特に自伝的な作品、*Dichtung und Wahrheit* と *Italienische Reise* への言及が多いことも注目すべきことであろう。さらにまた、*Gespräche mit Goethe* からの引用が巧みに活用されていることも注目されるであろう。Goethe の作品への言及に見られるこのような特徴は、当時の Pater の関心が *Sturm und Drang* の寵児 Goethe への関心ではなく、その克服者 Goethe への関心であり、詩人 Goethe ないしは作家 Goethe への関心ではなく、人間 Goethe、生活者 Goethe への関心であり、特に人間 Goethe の *Bildung* の過程に対する関心であったことをしめしている、と解してよいであろう。

'Winckelmann' にこのように明らかに現われている Pater の Goethe への共感——verbal なレヴェルにナイヴに露呈していると言ってもよい共感——を Benson も Wright も見落したことは、いやそればかりではない、両者とも、Pater のうちに Goethe からの離反を想定して、この離反が Pater をして Winckelmann に向わしめたと考えたことはまったく不可解なことである。



Pater の 'Winckelmann' は、独立した内容をもつ三つの部分から構成されている。Pater はその切れ目を行間の空白によってしめしているだけである。かりにそれぞれの部分にその内容にふさわしい表題をつけるとしたら、次のようになるであろう。(ページ数、行数は Library Edition (Macmillan, 1910) による。)

第一部 Winckelmann の生涯 (p.177 — p. 197, l. 16)

第二部 ギリシア芸術の誕生 (p. 197, l. 17 — p. 224, l. 26)

第三部 現代における教養 [別題, Goethe のギリシア主義] (p. 224, l. 27 — p. 232)

このなかで、Goethe あるいは Goethe の著作への言及が多いのは、第一部と第三部である。(第二部にも一つの言及がある。) また、内容的に Goethe との関連が問題になるのも、第一部と第三部である。したがって、以下ではこの二つの部分を考察することにする。第二部は、その内容の性質上、別の観点からの考察を要求するので、<sup>(9)</sup> 本稿では考察の対象としない。

'Winckelmann' の第一部は、冒頭における Goethe の評論 'Winckelmann' への言及に始まる。そして、Goethe の 'Winckelmann' の結末を引用して Winckelmann の死を述べ、Winckelmann と Goethe の実現しなかった面会を惜しむ文章で終る。ここでもっとも興味深

い問題は、Goethe の‘Winckelmann’ とこの第一部の関連の問題であろう。以下、この問題を考えてみよう。

Goethe の‘Winckelmann’ は、彼自身が編集した *Winckelmann und sein Jahrhundert* (1805) の一部をなす評論である。Goethe は、この評論において、先覚 Winckelmann のために文学的記念碑を建てることとともに、古典主義の宣言書を書くことを意図した。古代的 (=異教的) 人間を高らかに讃美するこの文章は、同時に、当時彼と対立していたロマン派 (Schlegel 兄弟など) ——ロマン派は古代ではなく、キリスト教的中世を讃美した——に対する公的な回答書でもあったのである。

‘Winckelmann’ は、独創的な構想にもとづく伝記である。この伝記の制作に Goethe が多くの時間と労力を費したことは、彼が盟友 Schiller にあてて、この文章を書くのに要した苦心の痕を読者に感づかれないという希望を述べていることから知られる。<sup>10</sup> ‘Winckelmann’ は読者の意識に「けだかい簡素さと静かな偉大さ」の感銘をおのずから呼び覚ますが、まさにこの感銘において Goethe の苦心はむくいられ、彼の希望は実現されている、と言うべきであろう。

まず、Goethe は、人間存在の様式の省察によって「古代的性情」という概念を設定する。彼は言う：——「人間がたぐいのない、期待もしなかったものをなしとげるのは、すべての性能が均等に彼のうちに融合するときである。」<sup>11</sup> そして、人間存在のこの理想を実現しているのが、最盛期の古代ギリシア人なのであり、また Goethe が設定する古代的性情なのである。それは、個々の力を、もしくはせいぜいいくつかの機能を、たがいに関連のないさまざまな目的のために行使することによって、自己自身をかき散らかしている「近代人」に対するのである。そして、Winckelmann は、この古代的性情の現代における体現者なのである。(「こういう古代的性情は、これを現代人の誰かに求めることができるのであれば、まさに Winckelmann に再現したと言ってよい。」<sup>12</sup>)

ついで、Goethe は、この〈Winckelmann = 古代的性情〉——ひとつの典型にまで高められたひとつの個性——を、あたかも Winckelmann が熱愛した古代彫像のように読者の前に立たせる。この超等身大の古代彫像に対して、Goethe は「異教的なもの」、「友情」、「美」、「哲学」などの見出しのもとに、強い照明の光——実は Goethe 自身の人間省察の光——をつぎつぎにあてる。すると、Winckelmann の古代的性情の特徴がひとつづつくっきりと明るみにでる。

このいわば彫像描写的な方法を採用したことによって、Goethe は発展の叙述を断念することになった。Winckelmann は、読者の前で次第に発展するのではなく、終始美と力にあふれる完成した姿で読者の前に立つことになる。そしてその完全な姿のまま読者の前から消えるのである。Winckelmann の非業の死は次のように述べられる。

彼は人間としては頂点をきわめ、そこから浄福の世界にのぼっていった。一瞬の恐怖、一瞬の苦痛が彼を生者の世界からつれ去っていった。こういう意味では、彼の幸運を称えることができよう。老衰、精神力の減退を彼は感じなかった。美術品の散逸は、彼が別の意味で予言していたのであるが、それは彼の目の前で行われはしなかった。彼は壮年の男ざかりを生き、完全な壮年のままでこの世を去ったのである。今や彼は、後世の追憶のなかで、いつまでも有能で力強い人物として現われるという利点を享受している。なぜなら、人間はこの世を去ったときの姿のままで冥界をさまようのであって、アキレウスは永遠に奮闘する青年としてわれわれの記憶に残されるのだからである。<sup>13)</sup>

すでに永遠の生命をもつ芸術作品と化したこの Winckelmann は、死ぬのではない。読者の目の前から消えるだけなのである。読者の意識に、古代の理想——「けだかい簡素さと静かな偉大さ」——の生き生きとした感銘と、その理想に向って努力しようとする強い衝動を遺して、

Pater の 'Winckelmann' 第一部は、Goethe の 'Winckelmann' に言及する次の一節で始まる。

Goethe の芸術批評論集には、Winckelmann の性格を論じている、不思議に深い含蓄のある文章が含まれている。Goethe は、彼の経歴を可能にしてくれた——が、ついに会うことがなかった——師 Winckelmann について語っているが、その口調は、あたかも、すでに理想の領域に退いてはいるが、熱情的な知的生涯の事件の色を今もなおとどめている、完成された、静かな教養のひとつの抽象的な典型を語るような口調である。彼は Winckelmann を、たえず新しい関心と呼び覚まして、いくたびも批評しなおすことができる、無限に深い暗示力をもっている芸術作品と同列においている。<sup>14)</sup>

これによって、Pater が Goethe の 'Winckelmann' を熟読玩味していたことがわかる。実際、これだけの語数で Goethe の評論の内容と感銘とをこれ以上適切に表現することは不可能であろう。

Pater が「Winckelmann の性格」と言い、また「すでに理想の領域に退いている、完成された、静かな教養の、ひとつの抽象的な典型」と言うとき、彼の念頭にあるのは Goethe の〈Winckelmann = 古代的性情〉のあの二つの面なのである。これは、すでに述べたように、個性（Pater の言葉では性格 character）という一つの面をもつと同時に、典型というもう一つの面をもっているのである。また、「Goethe は、Winckelmann を、たえず新しい関心と呼び覚まし、いくたびも批評しなおすことができる、無限に深い暗示力をもっている芸術作品と同列においている」という Pater の言葉は、直接には、Goethe の評論の冒頭の一節——「すぐれた人物の追憶は、すぐれた芸術作品を目の前にするのと同じように、折にふれてわれわれ



の考察心をかきたてる。すぐれた人物、すぐれた芸術作品——この二つの存在は、どんな世代にとっても遺産である。……」<sup>115</sup>という一節——を指す。が、Paterは、この言葉で冒頭の一節のことだけを言っているのではない。それとともに、Goetheの評論全体の彫像描写的な構成と手法のことを、またその構成と手法から生まれてくるあの独自の効果のことを言っているのである。そして、Goetheの‘Winckelmann’を「Winckelmannの性格を論じている不思議に深い含蓄のある文章」と呼ぶことによって、Paterは、彼がGoetheの評論から深い感動を受けたことを、そして彼がこの評論から多くの示唆を得ていることを卒直に表明している、と解してよいであろう。

にもかかわらず、Paterの‘Winckelmann’第一部は、Goetheの‘Winckelmann’とは明らかに異なった印象をあたえる。Goetheが描写するWinckelmannが超等身大のゼウス像であるとするならば、Paterのは等身大の人間像である。これは両者が採用した叙述の方法が異なるためであろう。Goetheは彫像描写的な方法を用いた。その結果、GoetheのWinckelmannは、近代人である読者の前にはじめから完成された姿で——人間存在の絶頂の象徴として——立つことになる。このWinckelmannは、永遠の生命をもつ芸術作品と化したWinckelmannである。Paterの方は発展の叙述という方法を用いた。その結果、PaterのWinckelmannは読者の前で、かつ読者とともに成長することになる。このWinckelmannは、現実と闘いながら理想に向かって進む一個の死すべき人間である。

が、Goetheの‘Winckelmann’とPaterの第一部があたえる印象の違いはこれにとどまらない。前者が統一的な効果を生むのに対して、後者が生む効果は、部分的には集中的であるにもかかわらず、全体としては奇妙に分散的である。これは両者のモチーフの用い方が異なるためであろう。古典主義の立場からロマン派に対して古代的（＝異教的）人間の美と力とをしめす必要があったGoetheは、彼の評論を〈Winckelmann＝古代的性情〉という一つのモチーフで貫いた。これが、彼の‘Winckelmann’が全篇相呼応してひとつの力強い統一的効果を生む原因であろう。（特に、冒頭の数節と結びの一節の対応はみごとである。）これに対して、人生の現実との関わりあいのなかで自我を知的に構築するという不安な仕事にとりかかったばかりの、20歳代半ばのPaterの方は、モチーフの用い方がもっと複雑微妙である。次にこれを説明しよう。

Paterは、誕生から死までのWinckelmannの伝記を書く。その書きかたには——つまり、伝記的事実の選択のしかたや、選択された事実の処理のしかたには——Winckelmannに対するPaterの強い共感がまぎれもなく現われている。Winckelmannがおかれている環境が反古代的であることが強調される。そして、この逆境に抗して古代的教養という目標に到達しようと苦闘するWinckelmannが共感を籠めて描かれるのである。が、このWinckelmannは、Goetheが描くWinckelmann——はじめから「まったく古代的な意味で、全体であり、完結である」<sup>116</sup> Winckelmann——ではない。「すべての性能を均等にみずからのうちに融合させている」<sup>117</sup> 古代的性情の体現者であるWinckelmannではない。このWinckelmannは、環境

がおしつけようとする「凡庸」から逃れるために、「彼の生の唯一の動機の育成に熱中する。」<sup>18</sup> この Winckelmann の「情熱は、その狭い範囲のなかで溶岩流のように激しく燃える。」<sup>19</sup> 明らかに、これは、Goethe が称える「古代人の幸福」ではない。むしろ、Goethe が「古代人の幸福」に対照させて「近代人の宿命」<sup>20</sup>と呼んでいるものである。が、この Winckelmann の「狭い、激しい」教養を Pater は弁護して言う：——「多くの場合において、自分の生まれつきの強い動機が存する〔一つの〕生を選択しなければ、より高い生を生きることは不可能である。そして、この一つの生を選択するということは、他の生のために保存されている王冠を放棄することを意味するのである」<sup>21</sup>と。Goethe ならば、おそらく、「そして、この一つの生をよく生きるということは、他の生に秘められている王冠をも獲得することを意味するのである」と言ったであろうに。<sup>22</sup> が、ともかく、この狭い、激しい教養に対する共感が Pater の 'Winckelmann' 第一部を支配しているモチーフなのである。<sup>23</sup>

もし、Pater が第一部をこのモチーフだけで貫いていたならば、第一部は、Goethe の 'Winckelmann' の効果とは内容的にはまったく異なっているが、それなりに統一的である、ひとつの効果を生んでいたであろう。が、第一部が現実にあたえる効果はもっと複雑である。別のモチーフが介入しているためである。それは、Winckelmann によってではなく Goethe によって象徴されている「普遍的教養」に対する渴望である。これが第一部の第二モチーフである。

おそらく、この間の事情を次のように説明してよいであろう。まず、Goethe は、みずからのうちに普遍的教養に対する渴望を自覚した。彼は、彼が渴望する普遍的教養の象徴として Winckelmann を用いることにより、〈Winckelmann = 古代的性情〉というモチーフを創作し、ついでこのモチーフにもとづいて評論 'Winckelmann' を創作した。次に、Pater は、Goethe が創作した 'Winckelmann' に刺激されて不思議な深い感動を経験した。が、この感動は、進行するにしたがっておのずから二つに分離し、Winckelmann によって象徴される狭い、激しい教養に対する共感と、Goethe によって象徴される普遍的教養に対する渴望になった。そして、Pater が Winckelmann の伝記を書こうとしたとき、この二つの心の動きはそれぞれ第一モチーフと第二モチーフになって、伝記的事実の選択のしかたと選択された事実の処理のしかたを規定することになった、と。以上の説明はきわめて大まかなものではあるが、それだけに巨視的な見取図としては役立つであろう。

第一部全体としては、第一モチーフの方が第二モチーフよりも量的には優勢に現われている。が、これは、狭い、激しい教養に対する Pater の共感が普遍的教養に対する彼の渴望よりも強かったことから生じた、と解釈すべきではないであろう。むしろ、これは、第一部が Winckelmann の伝記であって Goethe の伝記ではないという条件から生じた、と解釈すべきであろう。そしてこの条件自体は、'Winckelmann' が Jahn の *Biographische Aufsätze* に対する書評であるという条件から生じたのである。ともあれ、第二モチーフがときおり第一モチーフに干渉して、ときにはこれと調和し、ときにはこれと対立し、ときにはこれを圧倒

するのが認められる。例を挙げよう。Pater は、第一モチーフを強調した一節のあとで、第二モチーフを次のように導入する。

Goethe の教養の紛乱せる豊富さの全域のうちに、Winckelmann の影響が明澄な古代的精神の強い、統制的な底流として作用しているのをつねに認めることができる。Goethe は Eckermann に言う：——「ひとは Winckelmann から何も学ぶことはないが、彼の影響によって何かになろうとする」と。もしわれわれがこの影響の秘密は何であったかと問うならば、Goethe みずからは答えて言うであろう：——「全体性、自我との一致、知性の完全」と。しかしながら、これらの表現は、普遍的な教養をもつ Goethe にはきわめて適切であっても、Winckelmann の狭い、専一的な関心をよく表わすものとは思われない。疑いもなく、Winckelmann の完全は狭い完全である。彼が彼の生の唯一の動機の育成に熱中するさまは、Goethe の多面的な精力と著しい対照をなしている。しかし、Goethe に影響し、彼を教え、彼の教養に貢献したのは、Winckelmann においてはこの唯一の力がその完全な形で現われていたこと、すなわち、この力がその本来の型を忠実に現わしていたことなのである。……<sup>24</sup>

ここで Pater は、Winckelmann の狭い、激しい教養と Goethe の普遍的教養のあいだに、前者から後者への強い影響関係があることを主張している。さらに、彼はその影響関係を説明している。すなわち、引用文のまんなかあたりで、この関係についての Goethe 自身の説明（それは Goethe のモチーフ〈Winckelmann = 古代性情〉そのものである）がはっきりと否定されている。そして引用文の終りで、それに代わるべき説明があたえられている。が、その説明は、Goethe の教養は普遍的教養であるが、Winckelmann の教養は狭い、激しい教養であるということの tautology にすぎない。したがって、この説明は、形式的には真であるが、実質的には無意味である。説明の用をなしていない。つまり、なぜ、どのようにして狭い、激しい教養が、その反対の性質をもつ普遍的教養の形成に役立つかについては、この説明は何も教えない。そして、第一部のどこにもこの説明以上の説明、つまり、実質的に有意味である説明、はあたえられていない。

そのため、第一モチーフと第二モチーフは、読者の意識にそれぞれ単独に作用することになる。それぞれが、他から孤立した、自己完結的な効果を生むことになる。二つのモチーフの効果統合されて、一つのより豊かな効果に高まることはない。第一部は、きわめて印象的な多くの部分を含んでいるにもかかわらず、全体としては、Goethe の‘Winckelmann’がひとつの力強い統一的効果を生むのとは対照的に、分散的な効果を生むが、その主な原因はここにあると思われる。

‘Winckelmann’第一部に認められる上述のような特徴は、これを書いた Pater について次のことを明らかにしているように思われる。すなわち、(1) (これはすでに述べたことであるが)

Pater は、二つの熱情——Winckelmann によって象徴される狭い、激しい教養に対する共感と、Goethe によって象徴される普遍的教養に対する渴望——を経験していたこと。(2) Pater は、自我を注意深く形成するための基本設計図と言うべきもの——そこではこの二つの熱情が自我の形成のための契機として重要な役割をはたすことを彼は予感していた——を探求していたが、まだそれを発見していなかったこと。

Pater の 'Winckelmann' は、前に述べたように、三部からなっている。そして全体をしめくくる第三部の主題は、Winckelmann の教養ではない。Goethe の教養である。(Goethe の教養が Pater にとっては現代の教養である。) その第三部で Pater は、「Goethe のギリシア主義」の核心に「ひとつの注意深い、きびしい知的な生きかた」<sup>25</sup> を見だし、これを解説する。この「注意深い、きびしい知的な生きかた」こそ、彼が第一部で摸索しながら到達できなかったもの、自我を形成するための基本設計図なのである。つまり、第一部で未解決のままになっていた問題が、第三部で解答をあたえられているのである。そして、このゆえにこそ、Pater の 'Winckelmann' は第三部をもち、かつ第三部で終るのである。<sup>26</sup>

## 注

- (1) 'Winckelmann,' *Westminster Review*, lxxxvii (January 1867), 80-110. これは、のち1873年、*The Renaissance*, 初版に第八章として収められ(1877年の第二版でも同じ)、さらにのち1888年、第三版に第九章として収められた。
- (2) 他の二篇は、'Coleridge's Writings', lxxxv (January 1866), 106-32, と 'Poems by William Morris', xc (October 1868), 300-12, である。
- (3) このとき Pater が寄稿したのが、'Notes on Leonardo da Vinci' (1873年以降 'Leonardo da Vinci' と改題されて *The Renaissance* に収められた) である。
- (4) Pater は、1872年11月、John Chapman (*Westminster* の編集者) に 'Winckelmann' の *The Renaissance*, 初版への転載許可を求める手紙(11月27日付け)を書いた。この手紙のなかで Pater は、「そのうちまた [*Westminster* に] 寄稿したいと希望しています」と書いているが、これはいわゆる社交辞令だと思われる。ともかく、彼の「希望」は実現されなかった。他方 *Fortnightly* には、Pater はその後も寄稿をつづけ、1892年まで計16篇を寄稿した。Cf. Lawrence Evans (ed.): *Letters of Walter Pater* (London, 1970), p. 11.
- (5) A. C. Benson: *Walter Pater* (London, 1906), p. 14.
- (6) Thomas Wright: *The Life of Walter Pater* (London, 1907), I, p. 232.
- (7) Goethe に対する Pater の批判は、次のように要約されうであろう：——彼の批判はただ一点に尽きる。それは、Benson あるいは Wright が考えている点ではなく、次の点である。すなわち、Goethe が、通例芸術作品の主題、思想、情況などと呼ばれているもの——創作者の観点からは芸術的表現の題材という言葉によって包括されうるもの——を真の芸術作品を構成すべき純粋な美的形象に変形することにおいて、かならずしも完全ではないという点である、と。なお、Goethe に対する Pater の批判の詳細については、次の(私の)論文を参照していただきたい：——「Pater の Goethe 関心の意味」, *Cairn*, 第2号(九州大学大学院英文学研究会, 1961), pp. 27-40.
- (8) David J. DeLaura: *Hebrew and Hellene in Victorian England: Newman, Arnold, and Pater* (Austin, 1969), p. 202.

- (9) 第二部では、(1)Arnold の著作、(2)Hegel の *Aesthetik*、(3)Victoria 朝中期におけるイギリスの進歩思想 (Pater がやがてその寄稿者に加わることになった *Fortnightly* を支配していた熱烈な合理主義)、との関連が問題となるであろう。DeLaura は、第二部を(1)および(2)との関連という観点から研究している。See *Hebrew and Hellene*, pp. 202—22.
- (10) 1805年4月20日付けの手紙。Ernst Beutler (ed.): *Briefwechsel Goethe-Schiller* (Zürich and Stuttgart, 1949), p. 990.
- (11) Johann Wolfgang Goethe: *Schriften zur Kunst, Werke, Gedenkausgabe* (Zürich and Stuttgart, 1949), Vol. 13, p. 416.
- (12) *Ibid.*, p. 418.
- (13) *Ibid.*, p. 450.
- (14) Walter Pater: *The Renaissance: Studies in Art and Poetry* (London, 1st Ed. 1873, Library Ed. 1910), p. 177.
- (15) *Schriften zur Kunst*, p. 415.
- (16) *Ibid.*, p. 418.
- (17) *Ibid.*, p. 416.
- (18) *The Renaissance*, p. 185.
- (19) *Ibid.*
- (20) *Schriften zur Kunst*, p. 417.
- (21) *The Renaissance*, p. 188.
- (22) Goethe は、近代人と古代人を対比して次のように言う：——「近代人はものを考える場合、きまったように無限界へ飛んで行く。……古代人は、……美しいこの世界の好ましい限界のなかにこそ自分たちの唯一不動の生きる場があると思っていた。彼らはこの限界のなかにおかれ、ここに生きる定めをもち、ここに活動の場を見だし、ここで情熱の対象と養いを得ていたのである。」(*Schriften zur Kunst*, p. 417) そして彼は、古代人が「自分のことを離れず、限られた祖国をわが世界とし、自分と同胞の生きるべく定められた道を真剣に考え、全心全霊をもって現在に働きかけることに努めた」(*Ibid.*) ことを強調する。
- (23) しかしながら、第二部においてギリシア彫像の美と Winckelmann の気質を結びつける必要が生じると、Pater は Goethe 的モチーフをよみがえらせる。したがって、第二部のこの部分 (pp. 212—21) は第一部と inconsistent である。そして、このことは、'Winckelmann' 全体の効果の分散性を強めている。
- (24) *The Renaissance*, p. 185.
- (25) *Ibid.*, p. 228.
- (26) 次回に稿を改めて第三部を考察する。

(昭和50年9月30日受理)